早瀬の子供歌舞伎

藤岡真衣

最初に目にした村芝居は、江戸時代から続けられてきた香川県小豆島の肥土山歌舞伎であった。村の人びとが、顔に白粉を塗ってきらびやかな衣裳を身にまとい、茅葺きの歌舞伎舞台の上で額に汗をにじませながら芝居に没頭する姿が、とても印象に残った。ほかの地域でも、祭礼の中で歌舞伎が上演されていることがわかってくると、村落へ歌舞伎がどのように伝わり、定着していったのかということに関心を持つようになった。今回訪れた福井県三方郡美浜町早瀬も、江戸時代から村の人びとによって歌舞伎が演じられている地域である。

美浜町は福井県の若狭地方にあり、若狭湾に面した町である。大阪から美浜までは、電車で約2時間半。JR湖西線を北上し、敦賀まで出て、小浜線に乗り換えて一路西へ向かい、美浜駅に着くとバスで西北をめざす。早瀬は三方五湖の一つである久々子湖北部に位置し、中世以来漁業が盛んな土地である。



久々子湖に臨む

子供歌舞伎が奉納される日吉神社は、早瀬地区の北部に鎮座する。5月5日、午前中から例大祭が始まり、神事が行われた後、神社下の山車の上で子供による寿式三番叟が奉納される。その後、山車は、瑞林寺および浄妙寺門前、代祝子（祭礼全体を運営する者）宅前、当番町、町内をまわり、各所で三番叟を上演する。三番叟は、三人で演じる祝儀の舞である。三番叟が舞い終わると、見物する人びとから山車に向けて、おひねりが飛び、演じた子供にも笑みがこぼれる。木造の山車は、安政4年（1857）の建造とされ、高さ約7メートル、幅2メートル、奥行5メートルである。



寿式三番叟の上演
（瑞林寺門前）

このように山車の上で三番叟や歌舞伎を奉納する例は、滋賀県の長浜や岐阜県の垂井などにもみられる。長浜の曳山祭は、早瀬の歌舞伎に大きな影響を与えたと考えられている。

寿式三番叟の演じ手について地元の方に尋ねると、翁役は小学校低学年、三番叟役2人は高学年の子供が出演するのだという。かつて、出演する子供は当番町から出されたが、今では人数が足りない場合、他の町からも出演している。現在の早瀬では、三番叟のみ奉納されている。大正期頃までは三番叟のほか芝居も行われたが、昭和42年（1967）ごろには三番叟だけになった。その後一時中断した時期もあったが、昭和56年に三番叟が復活され、平成9年（1997）には町の無形民俗文化財に指定された。

早瀬の歌舞伎奉納の由来については、次の

ような伝承がある。安政3年（1856）に、コレラが流行した際、瑞林寺の住職が、疫病の蔓延は神仏の祟りであり、人身御供として子供歌舞伎を奉納せよとの託宣を受けた。そのため、村で山車を建造し、翌安政4年5月8日、寺社で子供歌舞伎を奉納すると、コレラの流行がおさまったという。

このような伝承とは別に、江戸時代後半の史料からも、早瀬における歌舞伎と祭礼について知ることができる。ひとつは文政元年（1818）の「村中申合倹約定之事（神事法事等諸参会ニ付）」（早瀬区有文書）、もうひとつは安政4年（1857）「安政四歳三方郡梅湖拝　山王宮初申祭曳山山蔵新調之日記」（同文書）である。

これらの文書には、祭礼の創始が記されている。文政期の文書によると、祭礼は「安永九子年相始り候」とし、安政期の文書にも「安永年中より山を調へ祭礼仕候也」とある。このことから、祭礼の創始期は安永期にさかのぼる可能性が高い。

歌舞伎と祭礼の関係については、文政期の文書ではすでに「曳やま」「舞子」「ねり子」の言葉がみられるが、「舞子」が歌舞伎の演者であったかどうかは不明である。一方、安政期の文書には、疫病のため芝居を行うようになったことが記され、前述の伝承と類似する内容がみられる。安政期の文書で注目すべきことは、安政4年の時点で、すでに芝居を上演する場所が、古くからの決まりで厳格に定められていたことである。その場所は、現在の山車の巡行場所とほとんど変わらない。つまり、安政4年以前から、芝居は山車で上演されていたことが考えられる。

文書から、文政元年時点では曳山を用いた祭礼が確実に行われていたこと、そして安政4年時点には芝居が上演されていたことなど、江戸時代の早瀬の祭礼と歌舞伎の様子がうかがわれる。

早瀬の歌舞伎上演には、村人以外に、他の地域の人びともかかわっている。昭和40年代ごろまでは京都・長浜・福知山・宮津などから専門の衣裳屋・化粧師を早瀬に招き、昭和50年までは、演目に合わせて京都・滋賀から役者を呼び、指導を依頼していた。三番叟だけを奉納するようになった昭和55年から平成元年ごろまでは、歌舞伎役者・尾上多美十郎（おのえたみじゅうろう）氏が中心となって指導にあたった。尾上多美十郎氏は明治生まれの、丹後宮津の出身で、村芝居の役者だったが、昭和4年（1929）から早瀬の子供歌舞伎の指導を依頼され、昭和8年（1933）には早瀬に移り住んだ。尾上氏は、演目ごとに別の役者を呼びよせたり衣裳の手配も引きうけた。

このように早瀬の子供歌舞伎は、地元の人びとの熱意とともに、周辺地域の人びとが深くかかわることによって今日まで続いている。若狭地方には山車の上で子供歌舞伎が上演されていた例が各所にもあったが、現在でも行われているのは早瀬だけになっており、貴重な事例である。

※最後になりましたが、早瀬の子供歌舞伎について、資料をご提供してくださるとともに、ご教示くださいました美浜町教育委員会の成田かおる氏に心から感謝を申し上げます。

〈参考文献〉

- 『広報 みはまNo.228』美浜町、1989年11月
- 美浜町誌編纂委員会編『わかさ美浜町誌〈美浜の文化〉第7巻 記す・遺す』美浜町、2007年
- 美浜町誌編纂委員会編『わかさ美浜町誌〈美浜の文化〉第4巻 舞う・踊る』美浜町、2008年



翁と三番叟

関西大学大学院文学研究科博士課程 後期課程 在学
なにわ・大阪文化遺産学研究センター 研究員